幽香さんを赤面させたいだけの人生だった

棚の上からお餅

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

花屋に勤めていた少年「早川（はやかわ）慎二（しんじ）」は、毎日通ってくれるお客さんに心を寄せる。

その心を寄せた人……　妖怪はとても嫉妬深くて、少しエロくて、血を見るのが好きで、でも優しくて……

そんな彼女との物語。

目次

第1話　僕と花妖怪 ―――― 1
第2話　僕と花妖怪の愛情表現 ― 7

第1話　僕と花妖怪

「あの……」
「何かしら？」
そう言って優しく微笑み返してくるのは、昨晩から俺と付き合うようになった彼女「風見幽香」さん。幽香さんはとても可憐で可愛く、そして世界で一番美しい。
美しい……　美しいのだが……
「包丁を…　下ろしてください……」
「あら、じゃあ今日の朝のアレは何かしら？」
アレ、と言うのは今朝、俺がリグルと少し楽しそうに会話していたことである。楽しそうに会話と言っても、そこまで深い話ではなく、ただ「向日葵の手入れ少し大変だねぇ。」とか、「あ、虫いるよ気を付けて。」とか、「あ、ゴキブｒ」などのくだらない会話である。
「ちょっとだけ楽しそうにリグルと話していただけで……　ひっ！」
「あらぁ、楽しそうに、ねぇ？」
包丁を更に首元まで近づけてきた幽香さんは、そう言って再び笑顔を見せた。普通の

笑顔なら可愛い、可愛いのだが……　幽香さん。今の笑顔はとても怖いです。
包丁を突き立てられている。側から見れば、それは強盗が人質を捉えて脅しているようにしか見えない。
両親の亡き後、花屋さんを受け継ぐ事になった俺「早川（はやかわ）　慎二（しんじ）」は、いつもの通り花の手入れをしていた。店の中に時折入ってくる虫などを払い避け、やっと店を開いた瞬間、まだ繁盛していないこの店に入ってきたのが今の俺の彼女、風見幽香さんである。
幽香さんは俺の顔を見ると、初めて会うのに優しく微笑んでくれて、俺が店の裏で丹精込めて育てた百合の花を買ってくれた。
それから毎日幽香さんは通ってくれるようになり、俺はだんだん彼女に好意を抱いて行き、今に至ると言う訳だが……
「さて、今の私はとても腹が立って慎二、あなたを殺して私のものにしてやりたいぐらいなのだけれど？」
「ご、ごめんなさい……　その、幽香さん？　刃が直に首の皮に当たってるんですけどおぉぉぉ!?」
「あら、当ててるのよ？」
「ごめんなさい、本当に悪気は無かったのです。　だから、その許してください。」
向日葵の手入れ、この作業をしている時は基本暑さにやられそうになる。そんな中、

誰か1人でも話せる人いないかな。そう思って話しかけたのがリグルなのだが、まさかこんな事になるとは思わなかった。

だってリグルだぜ？　一応幼女だぜ？　俺そんなロリコンに見える？

「幽香さん、そのロリコンじゃないので許して？」

「ロリコンじゃなくても、幼女体型に少し惹かれたんでしょ!?　ねぇ!?」

ひぃっ！

幽香さんはそう言うと包丁で軽く俺の首筋を撫でた。鳥肌が物凄く立つと同時に、俺の首筋から垂れた一滴の血。

「俺が惹かれるのは幽香さんだけです。」

そう俺はしっかり誠心誠意込めて幽香さんに言うと、幽香さんは俺の首筋から垂れた血を優しく舐める。

その舐めかたがとてもエロエロしく、俺のムスコが何故か立ち始めてくる。それを何とか抑えるため必死に別のことを考えるが、そんなことを考えれないぐらい、俺のムスコは大きさを増して行った。

その時

「ふぅん、そう……　分かったわ。」

幽香さんはそう言い、俺からそっと包丁を離した。

やっと分かってくれた！
俺はそう思って幽香さんの方を見るが、幽香さんはまだ笑顔を崩してはいなかった。
「なら、あの害虫を消せばいいのね。」
「な　に　も　分かっていませんがあぁぁぁぁぁ!?」
包丁を持って外に出ようとする幽香さんを、何とか羽交い締めの状態にして止めたのは、ムスコを抑えきった俺である。そして次に、幽香さんの手から包丁を手放そうとする、が……
「あら慎二？　あなたごときの握力で私の手から包丁を手放せるとでも？」
「ふっ、君の手から包丁は手放せなくても、僕は君の手は一生離さないよ？」
「……　馬鹿。」
「あれ、幽香さん？　顔赤くなって……　？」
「死ね、ばかぁ!!」
「ブフォァッ!?」
頬に思いっきり幽香さんの拳を喰らった俺は、幽香さんの手を呆気なく離してしまい、後方に勢いよく吹っ飛んで行ってしまった。

☆★☆

「ん……　あぁ、寝てた、のか？」
花を少しツンと刺激する匂い、これはきっと花の匂いだろう。
パッと目を覚ました俺は、重たい体を起こす。
次に俺の目に映ったのは……
半涙目でプルプルと震えている幽香さんだった。

「え、ちょ、幽香さん？」
「うぅ、慎二のばかぁ！」
幽香さんはそう言って俺に思いっきり抱きついてきた。
腕はしっかりと俺の後ろに回っていて、とても離してからそうにはない。ていうか離さなくていい。
こんなめっちゃ可愛い幽香さんは初めて見るので、困惑している俺に幽香さんは一言。
「浮気じゃないなら浮気じゃないって言ってよ？」
「言ったんですけど。」
半涙目で俺の胸に蹲る幽香さんの頭を撫でながら、俺はこんなに甘えてくる幽香さん

に少しだけ感動を覚えた。
「ねぇ、幽香さん？」
「何よ。」
ゆっくりと顔を上げた幽香さんに、僕は思いを伝えるような一言をぶつけた。
「好きだ！」
「私も！」
その時僕たちは熱い抱擁を交わし、寝起きにはまだ辛いキスを交わすのだった。

第2話　僕と花妖怪の愛情表現

「ふぅ、この向日葵も育ったなぁ。」

朝方。まだ日も東から見えるか見えないかのギリギリのライン。

俺はそんな時刻に、向日葵の手入れをしていた。向日葵の手入れと言っても虫をどけたり、水やりをしたりするだけである。

向日葵はキク科の一年草で、日回りと表記されることもあり、また、ニチリンソウ、ヒグルマ、ヒグルマソウ、ヒマワリソウ、ヒュウガアオイ、サンフラワー、ソレイユとも呼ばれるそうだ。

これは1週間前ほどに、幽香さんから延々と聞かされた話の中のごく一部。

幽香さん、本当に向日葵とかの話になると長いんだよな。

そう思いながら俺は向日葵に水をやる。

水をやると向日葵は生き返ったかのように、葉を水滴を使って照らし出し、萎れたように見える茎を立たせた。

そんな光景に少しばかり感動していると、後ろから声を掛けられた。

「あら、今日も早起き？　お疲れ様。」

そこにいたのは俺の彼女……幽香さんだ。
幽香さんはまだ日が昇るか昇らないかの時間帯なのに、すでに日傘をさしていた。因みに俺の太陽は幽香さんだけである。
「おはよう幽香さん。　今日も綺麗だね。」
「そ、そんな訳な……朝から何言ってるのよ……」
幽香さんはそう言うと、段々とリンゴのように頬を赤く染めて行く。
「あれ、幽香さん以外に照れ……」
「うるさい！」
幽香さんはそう言うと、俺に殴りかかろうとしてくる。
うん、知ってた。だって、これが幽香さんの愛情表現なのだから。
俺は幽香さんの拳をなんとか体を反らして避ける。
「幽香さん、そろそろその愛情表現やめたほうがいい、よ！」
迫り来る拳をまたなんとか避けると、俺はそう幽香さんに言うが。
幽香さんは頬を赤く染めたまま、何の悪びれもないように言った。
「あら、慎二？　私の愛情表現に不満があるのかしら？」
「いや、なんか抱き着くとかそう言う大胆な……危なっ！」
「ふふふ、避けるの上手くなったじゃない。　嬉しいわ。　分かったわ、慎二、貴方の首

に抱きついてあ　げ　る。」

「それ、俺死ぬやつだよね？」

向日葵を踏まないよう足に全神経を、幽香さんに殴られないように目に全神経を注ぎながら、俺はそう幽香さんと会話する。

こんな愛情表現みたいなので戦闘をするのは、これで７回目。

７回目となれば、これの終わらせ方ぐらい学習する。

幽香さんには……コレだ！

俺は足に力を入れて、その場から少し跳ぶと幽香さんの背後へ回る。

幽香さんは戦闘慣れしているのか、それに合わせて後ろへと向く。

が、そんな事を気にせず、俺は幽香さんに飛びつくように抱き着いた。

「!?」

「幽香さん、隙ありだよ。」

「ふぅん慎二、貴方一体なにを…？　あっ…だめ…そこは……だめぇ！」

幽香さんの胸元へと飛び込んだ俺は、取り敢えず目の前の柔らかいものから目を離し、脇腹に手を伸ばし、刺激するように指先を滑らかに動かす。

それと同時に幽香さんの体はビクンと跳ね、幽香さんの頬はますます紅潮する。

「んっ……あっ…ぁ…」

それでも指を動かすのをやめない俺に、幽香さんは嫌そうな顔をしながらも、手を動かし行動で否定を表すことはしなかった。
（可愛い。）
ハァハァと吐息を漏らす幽香さんに、そう感じた俺は更に指を動かす速度を上げた。
それと同時に幽香さんの声のトーンも速さも上がる。
「あっ…くぅ…うっ…あっ…あぁぁぁぁぁ！」
俺の指もそろそろ限界に達して来るのと同時に、幽香さんの声の調子もそろそろと言うのを出させていた。
「あっ……しん…じぃ…らめぇ……」
「あれ、幽香さん前より体力落ちたのかな？」
「ひゃっ…！　し…しんじ……もうげんか…あっ、あっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
絶頂に達したのだろうか、幽香さんの体は大きく跳ね、そして断末魔のような声を上げる。
そこで俺はようやくこちょこちょを止める。焦点の合っていない幽香さんは、舌を出しかけていて少しエロかった。
そしてようやく正気に戻った幽香さんは、真っ先に下を向いてプルプルと震えた。
顔は耳まで真っ赤になっており、怒っているのか、照れているのか、分からなかった。

「こ…の……」

顔を上げた幽香さんは傘を折り畳み、こちらへゆらりゆらりと歩いてくる。その歩いてくる姿はまさに殺人鬼のようだった。

「ゆ、幽香さん？　さっきのはちょっとした冗談で……ほら、幽香さんだって喜ん「うるさぁぁぁぁい！」グボアッ！」

幽香さんの鉄槌を喰らった俺は、そのまま後方に吹っ飛ばされてしまう。周りにいた要請はみな、怯えた顔をして何処かへと逃げて行った。そして、そんな吹っ飛ばされた俺に躊躇なく、幽香さんは更に近づいてくる。

あ、これは終わったな。

俺はそう思ってギュッと目を閉じる。

最後にふと、手先に向日葵が当たるのが分かった。

向日葵の花言葉……それは『私はあなただけを見つめる』。

思いを伝えるのが少し苦手で、すぐ手が出ちゃうけど、本当は優しくてエロい花妖怪さん、俺は貴女だけを見つめます。なので、これからも末長くよろしくお願いします。

俺は心の中でそう思い、意識を手放した。